



2016年度前期助成先が決定！ JFAの岩場環境整備活動を支援

写真◎小池徳久 Photo by Tokuhisa Koike 文◎滝沢守生 (CAJ事務局) Text by Morio Takizawa



長崎県野岳で行なわれたリボルト講習会。老化したプロテクション（ボルト）の打ち替えや、終了点の交換、設置、不要な残置スリング類の撤去などを行なっている



打ち替えられたボルトは高強度で従来のものより目立ちにくい、景観にも配慮したものになっている



CONSERVATION ALLIANCE JAPAN

コンサベーションアライアンスジャパン

<http://ca-j.org>

アウトドア関連企業12ブランドが基金を拠出し、日本の環境保護活動を行なっている団体に対し、資金援助という形で活動を支援するコンサベーション・アライアンス・ジャパン（アウトドア環境保護基金／以下CAJ）では、このほど2016年度前期助成金申請に対する審査会を開催した。

8月15日に締め切られ審査対象となった申請は全部で13件。本基金の存在と申請方法の告知などのピーアールがまだまだ不足しているのか、例年の申請数に比べると、やや寂しい申請数であった。

それでも、審査の対象となった活動はどれも心情的にも応援をしていきたい地域に根ざした地道な活動が多く、審査会では活発な議論が行なわれた。しかし、そんな白熱した議論の末、2016年度前期の助成対象となった団体は、日本フリークライミング協会（以下JFA）の岩場環境整備に関するプロジェクト1件のみにとどまった。

JFAは、フリークライミングの普及と振興のため、岩場の整備や安全対策、コンペの開催などを行なっているクライマーによるクライマーのための団体だ。今回、支援の対象となったのは、クライミングエリアの環境整備活動であり、10年ほど前からJFAでは老朽化したボルトの打ち替え（リボルト）を行なってきた。しかし、スポーツクライミングがオリンピック競技に採用されるなど、愛好者が増え、メジャーになるとともに社会的なさまざまな問題が顕在化し始める。なかでも報道などで、一般にも認知されることとなった景勝地や天然記念物等の岩に設置された確保用支点の存在が近年大きな問題となった。これらの事態を受け、JFAでは本格的に日本のクライミングエリアの現状調査に当たることに。

「フリークライミングの起源はもとも支点の設置を極力行わないで登るクリーンクライミングであるといわれ、元来環境思想に根ざしたスポーツであり、70年代にアメリカから日本に入ってきました。しかし、その概念が定着する以前に周囲の環境に考慮することなく打たれた支点類も数多く、それが今回のような問題となっているケースもあります。同時に、増え続けるクライミング人口により、岩場のある地元や地権者とのトラブル（事故や駐車、トイレ、その他マナーなどの問題。総じて、アクセス問題と呼んでいる）がすでに数多く発生しています。これらをきちんと解決していかないと、オリンピック競技にはなったものの、日

本の岩場ではどこもクライミングができないという事態にもなりかねません」

と危機感を募らせ、覚悟を持ってJFAが、正面から日本のクライミングエリアの環境整備にあたっていくなくてはならない、と語ってくれたのは理事の北岡和義さん。

しかし、日本全国の岩場の地権者および自然公園法や文化財保護法など関連法規にも照らし合わせたアクセス状況について調査を行うには、これにあたる人員やそれに伴う多額の人件費、派遣旅費、調査費などが必要である。また、過去に天然記念物などへ設置された支点の撤去や、関係各所の合意が得られたクライミングエリアの環境保全にも多額の費用が必要となってくる。

「いまは、会員からの会費や一部のクライマーからの寄付によってまかなわれていますが、メジャーとなったフリークライミングが、地域や一般社会に認められるようになるには、人材の育成やクライマーに対する啓蒙活動など、山岳界全体として取り組まなければならないと思っています」と北岡さんは続ける。

JFAのホームページでも杉野保氏が記事として紹介しているが、今後は日本でもアメリカの「アクセスファンド（Access Fund）」（クライミングエリアの環境整備基金）のような、エコロジーに基づいた大局的な見地から、クライミングエリアの環境保全活動を物心両面から支える組織や体制が必要になってくるに違いない。CAJでは、これからもJFAの活動に注目するとともに、日本のクライミングエリアの環境保全に注力していきたいと考えている。